

英語のフェイク目的語結果構文に関する一考察

— フェイク目的語のタイプとその意味機能 —

新 妻 明 子

1. はじめに

英語の結果構文では、標準的な結果構文以外に、目的語の位置に生じる名詞句が動詞に下位範疇化されていないタイプの結果構文があり、そのような結果構文をフェイク目的語結果構文と呼ぶ。本稿では、鈴木（2002, 2003）の分析に基づいてフェイク目的語結果構文における目的語に関して再考し、新妻（2009）で提案した AFP¹に関する問題点をはじめとする動詞と動詞に後続する名詞との関係について分析し、それらのタイプと意味拡張について考察する。新妻（2009）では、Levin と Rappaport Hovav の一連の研究（Levin 1999, Levin & Rappaport Hovav 1999, Rappaport Hovav & Levin 1999, Rappaport Hovav & Levin 2001）、および Vanden Wyngaerd（2001）の先行研究に基づき、結果構文を2つの下位事象の合成であると分析し、認知モデルを提案した。しかし、フェイク目的語結果構文における動詞と目的語のリンク体系に関しては説明が不十分であり、従来の研究においても他動詞タイプと自動詞タイプの結果構文の相違点に関しては説明されていない点が残されている。本稿では、フェイク目的語結果構文における動詞と目的語の関係を再分析することによって、下位範疇化されていない名詞句が動詞に後続するメカニズムや、使役構文をプロトタイプとする結果構文の意味拡張に関する記述的説明を試みる。

2. 結果構文における動詞と目的語の関係

英語の結果構文とは、基本的には「主語がある動作を行った結果、目的語がある結果状態になった。」と解釈される構文であり、(1)のように表される。

- (1) a. I shot John dead. (Simpson 1983)
- b. I painted the car yellow. (ibid.)
- c. The king laughed himself sick. (Napoli 1992)
- d. The joggers ran their Nikes threadbare. (Carrier and Randall 1992)

これらの結果構文の構成要素は(2)のように定義され、(3)のような意味構造を持つと一般的に考えられている。

(2) S + V + NP + RP

(3) [S CAUSE [NP BECOME RP]] BY [S V NP]

¹The Affected Participant を略して AFP と名づけた。The Affected Participant とは動詞の表す Active Event で発生したエネルギーによって影響を受けた参与体を表す。

さらに、新妻（2009）では、Levin と Rappaport Hovav の一連の研究（Levin 1999, Levin & Rappaport Hovav 1999, Rappaport Hovav & Levin 1999, Rappaport Hovav & Levin 2001）、および Vanden Wyngaerd（2001）らの先行研究に基づき、結果構文を Active Event と Measuring Event という 2 つの事象を合成したものであると分析した。Active Event とは一次述語の動詞が表すエネルギーを発する事象であり、Measuring Event とは Active Event がどの程度行われたのかを測る事象である。そして、2 つの事象合成における結果構文のプロトタイプの認知モデルを次のように表した。

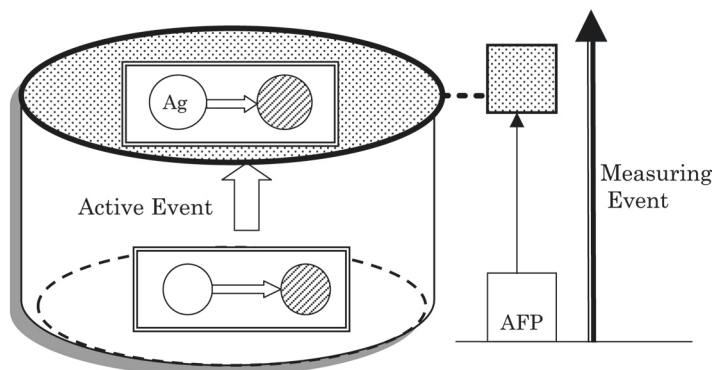


Figure 1

AFP とは「Active Event で発生したエネルギーによって影響を受けた参与体」を表し、Active Event におけるエネルギーが伝達されたものということになる。(1a) の場合、Active Event において動作主 (Ag) から発生したエネルギーによって影響を受けた参与体は John であり、動詞に後続する NP と AFP は一致することになる。

また、(1c), (1d) のような自動詞タイプの結果構文の場合は、Active Event は次のような認知モデルで表される。

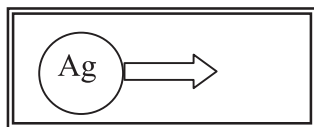


Figure 2

他動詞タイプの結果構文を表す認知モデルにおいて、エネルギー伝達を受けた参与体が項構造における被動作主 (Patient) として具現化されるという意味で、被動作主を斜線の円形で表し、それが AFP に対応することを示した。一方、自動詞タイプの結果構文では、動作主 (Ag) はエネルギーを発し、そのエネルギーが事象内の何かに伝達され则认为るが、Active event 内における参加者はひとつであり、 θ 役割としての被動作主を持たないため、斜線の円形がない Figure2 のようなモデルで表した。そして、Active Event において発せられたエネルギーによって影響を受けた物や人であれば、 θ 役割としての被動作主でなくて

も AFP として他動詞タイプと同様に動詞の後ろに置くことができると仮定し、さらに AFP は Measuring Event の測定基準としての機能も果たすと主張することによって、他動詞タイプと自動詞タイプの結果構文を統一的な認知モデルによって表すことを試みた。

しかし、このような認知モデルでは表しきれない疑問点がある。まず、他動詞タイプの結果構文における次のような違いが説明できないという点である。

- (4) a. He wiped the table clean.
- b. He wiped the table.
- (5) a. He wiped the crumbs off the table.
- b. *He wiped the crumbs.

同じ他動詞タイプの結果構文であっても、(4)のように下位範疇化された目的語を伴う結果構文と、(5)のように下位範疇化されていない目的語を伴う結果構文では、(4b)と(5b)の文法性に違いが生じる。認知モデルではあくまでも結果構文をひとつのまとまりとして捉えるが、他動詞タイプの結果構文において(4b)や(5b)は Active Event に相当することになり、下位範疇化された目的語とそうでない目的語を同等に扱うことには問題が残る。

また、そのように目的語が動詞に下位範疇化されていない結果構文のことをフェイク目的語結果構文と呼び、(1c)や(1d)のように、統語構造上は目的語の位置に名詞句が生じているが、動詞とは意味的に選択関係を持っていない。

- (6) a. The king laughed himself sick. (= (1c)) (Napoli 1992)
- b. *The king laughed himself.
- (7) a. The joggers ran their Nikes threadbare. (= (1d)) (Carrier and Randall 1992)
- b. *The joggers ran their Nikes.

このように下位範疇化されていない名詞句が動詞の後ろの目的語の位置に現れる現象は、他動詞でも自動詞でも見られるため、AFP として表した目的語の選択条件から考えると、他動詞タイプと自動詞タイプの二分法には問題が残ると思われる。

結果構文を Active Event と Measuring Event の2つの下位事象の合成であるとする、この下位範疇化されていない目的語のタイプを詳細に分析することによって、目的語の選択条件が明らかになり、2つの事象のリンキングや結果構文の生産性に関する条件をより体系的に明示できるのではないかと考える。そこで本稿では、下位範疇化されていない目的語が動詞の後ろに現れるフェイク目的語結果構文の目的語に焦点を当て、その特徴と成立条件を分析し、再考する。

3. フェイク目的語結果構文の特徴

フェイク目的語結果構文の動詞の多くは本来的に自動詞が多いことが指摘されている。また、エネルギー伝達を伴うことから、エネルギーを発するような動作動詞の例が多数見られる。さらに、他動詞でも下位範疇化に基づいた解釈は成立しない。したがって、結果述語のない他動詞の構文としては非文となる。

- (8) a. The king laughed himself sick. (= (6a)) (Napoli 1992)
 b. *The king laughed himself. (= (6b))
 (9) a. The joggers ran their Nikes threadbare. (= (7a)) (Carrier and Randall 1992)
 b. *The joggers ran their Nikes. (= (7b))

次に、フェイク目的語結果構文はその目的語のタイプから次のように分類できる。

A. 再帰代名詞(oneself)タイプ	
B. 動詞に下位範疇化されていない名詞句タイプ	(i) 譲渡不可能な身体部分を表す名詞句
	(ii) 動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句

Table 1

それぞれのタイプの例文をあげてみよう（目的語はイタリックで示してある）。

A. 再帰代名詞タイプ

- (10) a. Joe shouted *himself* hoarse.
 b. Sue ate *herself* sick. (中右・西村1998:190)

B(i) 譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプ

- (11) a. Everyone would be tearing *their hair* out. (鈴木 2002:192)
 b. Why is she sobbing *her heart* out? (鈴木 2002:192)

B(ii) 動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句タイプ

- (12) a. John drank *the pub* dry.
 b. Ralph tried to blink *the grisly vision* away. (鈴木 2002:192)

B(i)における「譲渡不可能な身体部分」とは、Cattell (1984) によると次のように定義される。

(13) 譲渡不可能な所有の関係

A phenomenon P is inalienable to X if X's P cannot become Y's P.

(X' P が Y' P になれないとき、P という現象は X にとって譲渡不可能である。)

つまり、(11a)の hair（髪の毛）の場合、私の髪の毛はあなたの髪の毛になることはできず、髪の毛は私にとって譲渡不可能であるということになる。ゆえに、あるものの所有者の変更ができないものであると言い換えることもできる。

また、B(ii)における「動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる」という点については、例えば(12a)の場合、drink（お酒を飲む）という行為は pub という場所の中で行われ、pub には alcohol（酒類）が置いてある。Pub と alcohol は包含関係にあり、メトニミー関係が成立する。Drink という行為との関係においても、“drink alcohol at the pub” という意味で “drink the pub” と表すことが、「メトニミー的に関連づけられる」といえる。

さらに、フェイク目的語結果構文では、アスペクト的にプロトタイプの結果構文とは異なる。プロトタイプの結果構文では、構文が表す文全体の解釈は一般的に完結性を示す。Levin and Rappaport (1995) などによって指摘されているように、結果述語がつくことによって継続相から完結相へと変わる。

- (14) a. ??They rubbed the gemstone in an hour.
 b. *?John pushed the heavy door in one minute.
 c. *?Mary cried in an hour.
- (15) a. They rubbed the gemstone smooth in an hour.
 b. John pushed the heavy door open in one minute.
 c. Mary cried herself to sleep in an hour.

(都築 2007:145)

(14)に示されるように、活動を表す動詞は継続相を示し、完結相に許される in 句と共に起できない。ところが、(15)に示されるように、結果述語がついてはじめて in 句と共に起できるようになるため、完結性を示しているといえる。

一方、フェイク目的語結果構文では、非完結相の解釈が可能となることや、非完結相の解釈しか可能ではないという事実が指摘されている。

- (16) a. I danced myself tired in/*for three hours.
 b. I laughed myself sick in/*for three hours.
 c. I shouted myself hoarse in/?for three hours. (Tenny 1994)
- (17) a. John walked his feet off in/for three hours.
 b. I cried my eyes out in/for three hours.
 c. Maria worked her hand to the bone in/for three hours. (Tenny 1994)
- (18) a. Sue worked her butt off for/*in an hour.
 b. The frog sang his heart out for the whole night/*in a night.
 (Jackendoff 1997:551)
- (19) a. John drank the pub dry in/*for three hours.
 b. They ran their shoes threadbare in/*for three hours.

また、フェイク目的語のタイプを見てみると、(16)は再帰代名詞タイプ (Table 1-A)、(17)と(18)は譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプ (Table 1-B(i))、(19)は動詞の行為からメトニミーに関連づけられる名詞句 (Table 1-B(ii)) であるが、それぞれの完結性の容認度は異なっていることがわかる。また、再帰代名詞タイプの目的語をとる結果構文の方は完結性を示すが、譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプの目的語をとる結果構文は完結性を示すとはいえない。さらに(17)と(18)を比較してみると、同じタイプの目的語をとるにもかかわらず、選択する目的語によってアスペクト的に異なる解釈を示しており、揺れがあることがわかる。

この章では、フェイク目的語結果構文の動詞のタイプ、フェイク目的語の分類、完結性と

いう3点からフェイク目的語結果構文の特徴をまとめた。

4. フェイク目的語結果構文再考

4.1 再帰代名詞タイプ目的語から見る意図性

フェイク目的語における再帰代名詞タイプにおいて、再帰代名詞が持つ自立した項としての性質は相対的に弱いということが鈴木（2002）によって指摘されている。そして、このような特徴は再帰動詞の生じる構文から示唆されるとしている。再帰代名詞“oneself”を導く再帰動詞のパターンは次のように分類することができる。

(20) 再帰代名詞の脱落を許す動詞：adjust, behave, shave, wash, dress など

- a. He shaved himself.
- b. He shaved.
- c. The barber shaved his customer.

(21) 脱落を許すが、目的語が人の時は義務的に再帰代名詞をとる動詞：enjoy

He enjoyed (himself) watching television.

(22) 再帰代名詞を義務的にとる動詞：pride, perjure, absent など

- a. She always {prides herself/*prides} on her academic background.
(Quirk et al. 1985:357)
- b. The politician perjured {himself/*his aide}.
(Levin 1993:107)

また、丸田（1998）では、空間形態動詞も再帰動詞として分析されており、次のような例が挙げられている。

(23) a. ...he always balanced himself on his wings. (OED)

- b. The boy perched (himself) on a stool.
- c. I rested (myself) for a while.
- d. He sat (himself) at my side.
(丸田1998:145)

これらの動詞の自動詞型では、Agent 以外の無生物主語が許されないことが Levin and Rappaport Hovav (1995:129) において指摘されている。

(24) a. We balanced on the wagon.

- b. *The load balanced on the wagon.
- c. John mounted on the bicycle.
- d. *The photograph mounted on the bulletin board.
- e. The bird perched on the twig.
- f. *The picture perched on the piano.
(丸田1998:144)

鈴木（2002）では、再帰動詞に空間形態動詞も含めて考え、「再帰動詞が基本的に意味するのは、自己の身体（特に、外見・形態・姿勢など）への意図的な働きかけの活動であり」

(鈴木 (2002:190))、(20)のような再帰動詞を典型的な再帰動詞と位置づけ、空間形態動詞と共に目的語の位置にある再帰代名詞が脱落可能であるということは、「自己への働きかけにおいては行為の対象が、明示するまでもなく自明であることから、これらの目的語が項として担う情報が相対的に軽くなっているということを反映している」(鈴木 (2002:190))と指摘している。

また、再帰代名詞には、次のような強意用法がある。

- (25) a. I *myself* wouldn't take any notice.
 b. I wouldn't take any notice *mySELF*.
 c. *MySELF*, I wouldn't take any notice of her. (Quirk et al. 1985:361)

再帰代名詞の強意用法は本来的に文脈に応じた随意的用法であることから、フェイク目的語結果構文は、「通常の結果構文とは対照的に、動詞の表す活動の過剰さによって、主語の身体上に予想外の（通例望ましくない）結果が生じる」という語用論的な動機づけが与えられていると述べられている（鈴木2002:191）。このように、通常は対象の存在を含意しない行為を表す動詞が結果構文に生じるのは、その行為が行為者本人を含む誰か、あるいは何かに影響を及ぼす程、通常とは異なる範囲や程度で極端に遂行されると解釈される場合であるといえることができる。言い換えると、その動詞の意味が「使役行為」を表すように拡張される場合にほかならない。「使役」のスキーマは次のようなものである。

- (26) W（主語）が意図的に遂行する（述語動詞の表す）行為Xの直接の結果として、Y（目的語）に（結果述語の指定する）変化Zが生じる。 (中右・西村 (1998:177))

ここで、述語動詞の表す行為は、「意図的に」遂行する行為と示されており、先行研究における「エネルギーを発する」という条件に加えて、それが意図的に行われている行為であることが目的語の選択において必要条件であると思われる。次の例を見てみよう。

- (27) a. He is starving himself to death.
 b. He is starving to death. (中右・西村 (1998:183))

(27a)は自分の意図的な行為の結果として主語が死にそうである、すなわち、主語自身が現在の自らの状態に対する「責任」の主体である、という「使役行為」解釈を表している。具体的には、減量のためにわざと食わず、無理なダイエットや断食をするというような行為である。それに対して、(27b)は、おそらく自分ではどうしようもない事情により、主語が餓死しかけているという事態に対して、終結に至る直前の「単純変化²」という自然な捉え方を適用している。したがって(27a)と(27b)の対立は次の(28a)と(28b)の対立の一種であり、(27a)は無理なダイエットまたは断食を一種の自殺行為と見なしていることになる。

²Langacker (1991:7.1.2, 9.2.2) の意味での「絶対的解釈」(absolute construal) が変化に適用される場合を「単純変化」解釈と呼ぶ (中右・西村 (1998:182))。

(28) a. He is killing himself.

b. He is dying.

(中右・西村 1998:183)

また、鈴木（2002）では、結果構文における多くの動詞との組み合わせで、主語と同一指示の oneself のみがフェイク目的語として認められるという事実から、再帰代名詞目的語の項としての「軽さ」を指摘している。

(29) a. We laughed ourselves silly.

b. *We laughed Billy/the guests silly.

(Verspoor 1997:128)

この例では、前述した「動詞の表す活動の過剰さによって、主語の身体上に予想外の（通例望ましくない）結果が生じる」という語用論的な動機づけも当てはまる。

このように、「動詞の表す活動がエネルギー放出を伴い、それが何かに影響を与える」という条件だけでは不十分であり、動詞の表す活動は「意図的」に行われるということと、「その活動の過剰さによって主語の身体上に予想外の結果が生じる」という条件を加える必要があると考えられる。ゆえに、再帰代名詞タイプの結果構文では、結果述語に「身体機能の正常な状態からの否定的な方向への逸脱、つまり、機能不全状態を表すもの」³を選択することになる（Suzuki 2006）。このことから、再帰代名詞タイプの結果構文における意味的なスキーマとして、「活動は意図的に行われるが、それが過剰に行われたことによって、意図によってそれ以上コントロールできない結果状態に至る」が存在すると考えられ、「それ以上コントロールできない結果状態」という点からアスペクトにおける完結性とも一致するのではないかと思われる。

これまで述べてきたように、項としては「軽い」とみなされる再帰代名詞目的語が、動作の意図性という観点から再考することにより、フェイク目的語結果構文に義務的に要請されることを示唆した。それでは、結果述語に機能不全形容詞を選択する条件はどこから生じるのだろうか。

4.2 フェイク目的語の義務的な要請メカニズム

前節で、フェイク目的語結果構文において、フェイク目的語である再帰代名詞 oneself が現れる場合の行為の意図性について指摘した。中右（1994）によると、物理的行為を表す行為述語の下位類型は以下のように示すことができる。

(30) a. AFFECT (ACTOR, PATIENT) (影響)

b. EFFECT (ACTOR, RESULTANT) (結果)

c. ACT (ACTOR, RANGE) (動作)

このうち、フェイク目的語結果構文は(30c)の動作タイプに当てはまるといえる。(30c)における RANGE とは「指定領域」を表し、行為の適用範囲を一定の枠に限定することによ

³Suzuki（2006）では、これを「機能不全形容詞(dysfunctional adjectives)」と呼ぶ。

て、何らかの意味で行為を特定化あるいは指定する実体のことをいう。そして、その結果、行為の不可欠構成成分として動詞の表す行為と一体化し、全体で単一の行為を指し示すものである。再帰代名詞タイプのフェイク目的語結果構文に当てはめてみると、ここで必要とされる RANGE の内部構造は、トラジェクターの機能を果たす再帰代名詞とランドマークの機能を果たす変化を表す属性から成り立っていると考えられる。鈴木 (2002) によると、「フェイク目的語結果構文における oneself は、動詞の行為によって引き起こされる状態変化の生じる領域 (region) を抽象的に指定するということになる」と述べており、これは行為述語の動作を表す下位類型にも当てはまるといえる。

また、Rappaport Hovav and Levin (2000:21) は、「事象構造における下位現象ひとつについて、統語構造で少なくともひとつの項が具現化されていなければならない」というリンキング条件 (The Argument-per-Subevent Condition) に基づく説明を提案している。つまり、フェイク目的語結果構文では、事象全体への参加者はひとりだが、使役事象と結果事象の 2 つの下位事象に対応した項をそれぞれ統語構造上に具現化する必要があるので、結果事象に対応して再帰代名詞 oneself が具現化されるということになる。

さらに、Rappaport Hovav and Levin (2001:783) では、2 つの下位事象の間には次のような特性も成り立つと述べている。

- (31) a. The subevents need not be temporally dependent.
- b. The result subevent cannot begin before the causing subevent.
- c. Only the result subevent can bound the event as a whole.
- d. There is no intervening event between the causing subevent and the result subevent; that is, causation is direct.

(Rappaport Hovav and Levin 2001:783)

(31c)より、下位事象によって結果構文全体の事象が制限されるということは、結果構文における結果事象の完結性を示している。

このことから、フェイク目的語結果構文も、これまで見てきたように結果状態を引き起こす使役事象とその結果状態を表す結果事象の 2 つの下位事象から成り立っており、事象構造においては、Tenny のいう段階性を持つ属性 (gradable property) を尺度として事象を時間軸上で測定することにより、完結性の解釈を得るグループに分類される。フェイク目的語結果構文における再帰代名詞 oneself は、測定尺度としての「属性(property)」を語彙化したものといえる (鈴木 2002:191)。さらに鈴木 (2002) が提案しているように、事象構造において完全な指示性を持つ MEASURE 項を形成するためのある種の機能関数 (functor) として oneself の存在が要請されると考える。これを新妻 (2009) で提案した Measuring Event の認知モデルで表すと次のようになる。

Measuring Event Model

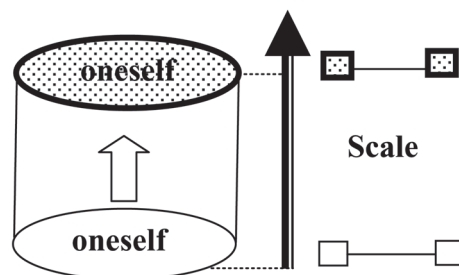


Figure 2

問題点で指摘したように、測定尺度（scale）の属性まではこのモデルでは点線でしか表すことができないが、再帰代名詞 oneself が義務的に要請される理由について鈴木（2002）が提案するように、記述的に明示する必要がある。

しかし、次のように、主語と同一指示の oneself 以外でも成立する結果構文も認められる場合があり、(29)との矛盾が生じる。

(32) We laughed the speaker off the stage. (鈴木 2003:233)

(29)との対比からわかるように、同じ動作でも再帰代名詞以外の目的語の選択にはまた別の条件が関与していると考えられる。次節では、フェイク目的語のうちひとつのタイプである動詞に下位範疇化されていない名詞句タイプを見ていくことにする。

4.3 動詞に下位範疇化されていない名詞句タイプの結果構文

第2章でフェイク目的語結果構文における目的語のタイプを大きく2つに分類したが、そのひとつが動詞に下位範疇化されていない名詞句タイプである。さらにその下位分類は、譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプと、動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句タイプとなる。以下にそのタイプと例文を再掲する。

譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプ

- (33) a. Everyone would be tearing *their hair* out. (= (11a))
 b. Why is she sobbing *her heart* out? (= (11b))

動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句タイプ

- (34) a. John drank *the pub* dry. (= (12a))
 b. Ralph tried to blink *the grisly vision* away. (= (12b))

まず、譲渡不可能な身体部分を表す名詞句タイプの場合、イディオム性の強い固定化した誇張表現が多いことが指摘されている。また、結果構文全体としての意味において、目的語の身体部分だけが機能不全状態に陥るというよりは、動作主全体にそのような状態が影響を

与えているという解釈になることが多い。再帰代名詞 oneself で人間全体を表すとする、身体部分はその人間の部分を表すといえるため、「全体と部分」の関係と捉えることができる。そのため、フェイク目的語としての機能としては、再帰代名詞タイプの目的語と同様であると考えられる。また、このタイプの結果構文においては、付加詞な結果句をとることが多いことから、測定尺度の領域がより広がるといえる。そのため、前節で述べた鈴木(2002)の提案より、MEASURE 項を形成するためのある種の機能関数としてフェイク目的語が要請されると考えれば、譲渡不可能な身体部分を表す名詞句は、再帰代名詞 oneself よりもより明示的な属性を示すと言い換えることができる。したがって、選択条件やその機能においては、基本的に再帰代名詞タイプから拡張したタイプであるとあるといえる。

また、譲渡不可能な身体部分を表す名詞句が再帰代名詞の拡張形であると考えることによって、動詞の行為からメトニミー的に関連づけられる名詞句タイプは、さらに拡張が進んだものであると考えることができる。実際、動詞の行為からメトニミー的に関連付けられる名詞句が目的語として現れる例には、多様な動詞と目的語の組み合わせが見られ、動詞、目的語、結果述語の組み合わせの根拠の記述はある意味アドホックにならざるを得ないといえる。しかし、拡張には何らかの規則性が関与しているはずであり、その一因として動詞のクオリア構造による指定が考えられる。動詞のクオリア構造とは次のように規定される。

(35) 動詞のクオリア構造

- a. 形式役割＝その動詞が表す事象 (eventuality) のタイプ (activity, state, process, transition)
- b. 構成役割＝その動詞の語彙概念構造 (LCS) (影山 (1996)) で想定したような構造化された意味表示
- c. 目的役割＝その動詞が本来的に含意する動作の目的や恒常的機能
- d. 主体役割＝その動詞表現が成立するための前提 (presupposition) やフレーム (場面や背景状況) (影山 2007:36)

(34a)の場合、お酒を飲む (drank) という行為の主体役割として、お酒を飲む場所がパブであることから、パブ (the pub) というフレームを含んでいると捉えることができ、さらに、パブとお酒の間にはメトニミーが成立している。(34b)では、瞬きをする (blink) という行為の目的役割として、目蓋を閉じたり開いたりする動作によって目の前のものを見たり見なかったりすることが考えられる。また、主体役割として、目の前に何らかの光景が存在し、驚いたり信じられない感情を伴う場合に行うということも考えられる。いずれにせよ、動詞、目的語、結果述語の間には1つのセッティングとして関連づけられる動機があり、その動機づけが複数関連しあっていると思われる。⁴

結論として、フェイク目的語結果構文の目的語は、動詞による意図的な行為が影響を与え、好ましくない状態になった対象物を表すが、次のように拡張したことにより、3つのタイプに分類されるといえる。

⁴その動機づけに関する規定の詳細に関しては紙面の都合上今後の研究課題としたい。

(36) a. 行為により変化した対象物全体を直接的に表す再帰代名詞



b. 再帰代名詞の一部である譲渡不可能な身体部分



c. 行為とメトニミー関係にあるもの

(36a)から(36c)への抽象化する拡張に伴って、目的語の動詞や結果述語とのリンキングはより間接的になっていくと考えられることから、その組み合わせにはより制約が必要となり、生産性が限られてくるひとつの要因となっていると思われる。

5. まとめ

本稿では、結果構文における目的語と動詞との関係についてのメカニズムを再考するために、結果構文の中のフェイク目的語結果構文に焦点を当て、その目的語タイプに応じてフェイク目的語を3種類に分類した。統語構造上は認可されないフェイク目的語が認可されるメカニズムとして、鈴木（2002）の提案する結果事象における MEASURE 項としての機能を取り上げた。この機能によって、フェイク目的語は結果構文において義務的に要請されるものとなり得ることが明らかになった。さらに、3種類に分類したフェイク目的語は、再帰代名詞タイプからの意味拡張によって分化したものである可能性を示唆した。それらの意味拡張に動詞、目的語、結果述語それぞれのクオリア構造がどのように関連しているのか、その拡張における制約などについて、新たな事例も含めて今後さらに詳細に分析を進めていく必要がある。

【参考文献】

- Carrier, J. and J. H. Randall. 1992. "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives." *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Cattell, R. (1984) *The composite predicates in English: syntax and semantics* 17. Academic Press.
- Jackendoff, R. (1997) "Twistin' the Night Away," *Language* 73, 534-559.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」, 小野尚之 (編) (2007) 33-65.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A preliminary Investigation*, The University of Chicago Press.
- Levin, B. (1999) "Objecthood: An Event Structure Perspective," to appear in *CLS 35, vol.1: The Main Session*, 1999.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, B. and Rappaport Hovav (1999) "Two Structures for Compositionally Derived Events," *SALT* 9, 199-223.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.

- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 中右実・西村義樹 (1998) 『構文と事象構造』研究社.
- Napoli, Donna J. 1992. "Secondary Resultative Predicates in Italian." *Journal of Linguistics* 28, 53-90.
- 新妻明子 (2009) 「英語の結果構文について—発展的認知モデルの提案」, 英文学研究支部統合号 Vol.II, 47(375)-66(394)
- 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文の新視点』(ひつじ研究叢書〈言語編〉第62巻). 東ひつじ書房.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik (1985) *A comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1999) "Two Types of Compositionally Derived Events," ms., Bar Ilan University and Northwestern University.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2000) "An Event Structure Account of English Resultatives," ms., The Hebrew University of Jerusalem and Stanford University.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Simpson, J. 1983. "Resultatives." In Levin, Rappaport, and Zaenen (eds.). (1983), 143-157.
- 鈴木亨 (2002) 「英語における半支持的述語—Some Predicates Fake Their Way into Object Positions」, 山形大学紀要 (人文科学) 第15巻第1号, 179(130)-196(113).
- 鈴木亨 (2003) 「測定尺度と特異的事象の描写」, 山形大学紀要 (人文科学) 第15巻第2号, 221(100)-240(81).
- Suzuki, T. (2006) "Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction Deconstructed?" *English Linguistics Vol.23, No.1*, 213-244.
- Tenny, C. L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers.
- 都築雅子 (2007) 『ゲルマン諸語に見られる派生的結果構文に関する一考察』, 小野尚之 (編) (2007), 143-176.
- Vanden Wyngaerd, G. (2001) "Measuring Events," *Language* 77, 61-90.
- Verspoor, C. M. (1997) *Contextually-Dependent Lexical Semantics*. Edinburgh: University of Edinburgh dissertation.